18/5/12 DIALOG(R)File 351:Derwent WPI (c) 2001 Derwent Info Ltd. All rts. reserv.

007916115

WPI Acc No: 1989-181227/198925

XRAM Acc No: C89-079903

Plasmid transformed with genes - used for coding pre-albumin downstream

of of yeast character expression regulating region Patent Assignee: KAGAKU OYOBI KESSEI RYOHO (KAGA) Number of Countries: 001 Number of Patents: 002

Patent Family:

Patent No Kind Date Applicat No Kind Date JP 1117790 Α 19890510 JP 87276598 . A 19871030 198925 JP 96011074 B2 19960207 JP 87276598 19871030 Α 199610

Priority Applications (No Type Date): JP 87276598 A 19871030

Patent Details:

Patent No Kind Lan Pg Main IPC Filing Notes

JP 1117790 A 12

JP 96011074 B2 10 C12P-021/02 Based on patent JP 1117790

Abstract (Basic): JP 1117790 A

Recombinant DNA which is a shuttle vector comprising genes both yeast and E. coli and yeast's character expression regulation region, and which is transduced with cDNA for coding human prealbumin in the lower portion of the region. The cDNA is pref. a gene for coding human normal prealbumin, specifically peptides of lst-147th amino acids, which has specific sequence. USE/ADVANTAGE - Prealbumin with amino acid at its any site transformed can be easily produced in quantity. An exemplary abnormal albumin thus produced, i.e. albumin having methionin at 30th amino acid from N-terminus instead of valine is useful to diagnosis for familial amyloido pheurobachy (FAP).

0/6

Title Terms: PLASMID; TRANSFORM; GENE; CODE; PRE; ALBUMIN; DOWNSTREAM; YEAST; CHARACTER; EXPRESS; REGULATE; REGION

Derwent Class: B04; D16

International Patent Class (Main): C12P-021/02

International Patent Class (Additional): C07K-013/00; C12N-015/00;

C12N-015/09; C12P-021/02; C12R-001-865

File Segment: CPI

の日本国特許庁(JP)

⑩特許出願公開

平1-117790 四公開特許公報(A)

Mint Cl.4

識別記号

庁内整理番号

码公開 平成1年(1989)5月10日

C 12 N C 07 K C 12 P 15/00 13/00

21/02

A-8412-4B 8318-4H

C-6712-4B ※審査請求 未請求 発明の数 1 (全12頁)

公発明の名称

プレアルブミンをコードする遺伝子を組込んだ組換えプラスミドお よびこれを用いたプレアルブミンの製法

> 頭 昭62-276598 の特

願 昭62(1987)10月30日 御出

特許法第30条第1項適用 昭和62年8月25日発行の「生化学vol.59%8,1987(第60回日本生化学会大 会抄録号)」に掲載し発表

73発 明 菅 原

中

敬 信 熊本県熊本市武蔵ケ丘2-142

明者 勿発

武 上 博 能本県能本市清水町高平402-1

勿発 明 者 寛

能本県菊池郡合志町幾久富1647-151

の出 殂

財団法人化学及血清療

能本県能本市清水町大窪668番地

法研究所

20代 理 最終頁に続く

知 弁理士 筒井

1. 無明の名称

プレアルプミンをコードする遺伝子を組込んだ 組換えブラスミドおよびこれを用いたプレアルブ ミンの製法

2.特許請求の範囲

- (1) 静母の遺伝子と大脳菌の遺伝子を含み、かつ **設 母 の 形 質 免 現 質 節 領 域 を 担 う シャト ル ベ ク ター** であり、その形質発現調節領域下流にヒトのプレ アルプミンをコードするcDNAを組込んだこと を特徴とする組換えブラスミド。
- (2) 族 c D N A がヒトの正常プレアルプミンをコ ードする遺伝子である前記第(1)項記載の組換えブ ラスミド。
- (3) 該CDNAがヒトの正常プレアルプミン遺伝 子から難訳される第1番目から第147番目アミ ノ酸までのペプチドをコードする遺伝子を含む前 記集(2)項記載の組換えブラスミド。
- (4) 旗 c D N A が下記の遺伝子配列を含む遺伝子 断片である前記第(3)項記載の組換えプラスミド。

ATG GCT TCT CAT CGT CTG CTC CTC CTC TGC CTT GCT GGA CTG GTA TTT GTG TCT GAG GCT GGC CCT ACG GGC ACC GGT GAA TCC AAG TGT CCT CTG ATG GTC AAA GTT CTA GAT GCT GTC CGA GGC AGT CCT GCC ATC AAT GTG GCC GTG CAT GTG TTC AGA AAG GCT GCT GAT GAC ACC TGG GAG CCA TTT GCC TCT GGG AAA ACC AGT GAG TCT GGA GAG CTG CAT GGG CTC ACA ACT GAG GAG GAA TTT GTA GAA GGG ATA TAC AAA GTG GAA ATA GAC ACC AAA TCT TAC TGG AAG GCA CTT GGC ATC TCC CCA TTC CAT GAG CAT GCÀ GAG GTG GTA TTC ACA GCC AAC GAC TCC GGC CCC CGC CGC TAC ACC ATT GCC GCC CTG CTG AGC CCC TAC-TCC TAT TCC ACC ACG GCT GTC GTC ACC AAT CCC AAG GAA TGA

- (5) 跛cDNAがヒトの正常プレアルプミン遺伝 子から類訳される第21番目から第147番目ア ミノ酸までのペプチドをコードする遺伝子を合む 前記第(2)項記載の組換えブラスミド。
- (6) 独 c D N A が下記の遺伝子配列を含む遺伝子 断片である前記第(5)項記載の組換えブラスミド。

GGC CCT ACG GGC ACC GGT GAA TCC AAG TGT CCT
CTG ATG GTC AAA GTT CTA GAT GCT GTC CGA GGC
AGT CCT GCC ATC AAT GTG GCC GTG CAT GTG TTC
AGA AAG GCT GCT GAT GAC ACC TGG GAG CCA TTT
GCC TCT GGG AAA ACC AGT GAG TCT GGA GAG CTG
CAT GGG CTC ACA ACT GAG GAG GAA TTT GTA GAA
GGG ATA TAC AAA GTG GAA ATA GAC ACC AAA TCT
TAC TGG AAG GCA CTT GGC ATC TCC CCA TTC CAT
GAG CAT GCA GAG GTG GTA TTC ACA GCC AAC GAC
TCC GGC CCC CGC CGC TAC ACC ATT GCC GCC CTG
CTG AGC CCC TAC TCC TAT TCC ACC ACG GCT GTC

- (7) 該 c D N A が F A P 患者が持つ異型プレアル プミンをコードする遺伝子である前記第(1)項記載 の組換えプラスミド。
- (8) 該 c D N A が F A P 思者が持つ異型プレアルプミン違伝子から翻訳される第1番目から第14 7番目アミノ酸までのペプチドをコードする遺伝 子を含む前記第(7)項記載の組換えブラスミド。
- (8) 彼 c D N A が下記の遺伝子配列を含む遺伝子

断片である前記簿(10)項記載の組換えプラスミド。
GGC CCT ACG GGC ACC GGT GAA TCC AAG TGT CCT
CTG ATG GTC AAA GTT CTA GAT GCT GTC CGA GGC
AGT CCT GCC ATC AAT GTG GCC ATG CAT GTG TTC
AGA AAG GCT GCT GAT GAC ACC TGG GAG CCA TTT
GCC TCT GGG AAA ACC AGT GAG TCT GGA GAG CTG
CAT GGG CTC ACA ACT GAG GAG GAA TTT GTA GAA
GGG ATA TAC AAA GTG GAA ATA GAC ACC AAA TCT
TAC TGG AAG GCA CTT GGC ATC TCC CCA TTC CAT
GAG CAT GCA GAG GTG GTA TTC ACA GCC AAC GAC
TCC GGC CCC CGC CGC TAC ACC ATT GCC GCC CTG
CTG AGC CCC TAC TCC TAT TCC ACC ACG GCT GTC
GTC ACC AAT CCC AAG GAA TGA

- (12) 前記第(1)項の組換えプラスミドを酵母 Sac charonyces cerevisiae に導入することにより形質転換酵母を得、この形質転換酵母を培養することを特徴とするヒトプレアルプミンの創法。
- (13) 該プレアルプミンがヒトの正常プレアルプミンである前記第(12)項記載の製法。
- (14) はプレアルプミンがヒトの異型プレアルプミ

断片である前記集(8)項記載の組換えプラスミド。
ATG GCT TCT CAT CGT CTG CTC CTC CTC TGC CTT
GCT GGA CTG GTA TTT GTG TCT GAG GCT GGC CCT
ACG GGC ACC GGT GAA TCC AAG TGT CCT CTG ATG
GTC AAA GTT CTA GAT GCT GTC CGA GGC AGT CCT
GCC ATC AAT GTG GCC ATG CAT GTG TTC AGA AAG
GCT GCT GAT GAC ACC TGG GAG CCA TTT GCC TCT
GGG AAA ACC AGT GAG TCT GGA GAG CTG CAT GGG
CTC ACA ACT GAG GAG GAA TTT GTA GAA GGG ATA
TAC AAA GTG GAA ATA GAC ACC AAA TCT TAC TGG
AAG GCA CTT GGC ATC TCC CCA TTC CAT GAG CAT
GCA GAG GTG GTA TTC ACA GCC AAC GAC TCC GGC
CCC CGC CGC TAC ACC ATT GCC GCC CTG CTG AGC
CCC TAC TCC TAT TCC ACC ACG GCT GTC GTC ACC
AAT CCC AAG GAA TGA

(10) 彼 c D N A が F A P 患者が持つ異型プレアルプミン遺伝子から顕訳される第2 1 番目から第1 4 7 番目アミノ敵までのペプチドをコードする遺伝子を含む前記第(7)項記載の組換えプラスミド。
(11) 雄 c D N A が下記の遺伝子配列を含む遺伝子

ンである前記第(12)項記載の製法。

3.発明の詳細な説明

本発明は、ヒトのプレアルプミンをコードする
c D N A を組込んだ組換えブラスミド、およびこれを酵母に導入して得られた形質転換酵母によるプレアルプミンの製法に関する。すなわち、ヒトの正常プレアルプミン、更には、F A P 患者の持つ異型プレアルプミンをコードするc D N A 断片を大腸菌および酵母の両方で増殖しうるシャトルベクターに担われた形質発現調節領域(プロモーター)の下流に組込んだ組換えブラスミドを得、これを酵母に与えて形質転換を起こさせて形質転換を起こさせて形質転換を起こさせて形質転換を日とし、これを培養させて産生されるプレアルプミン(正常プレアルプミンもしくは異型プレアルプミン)を得る方法に関する。

プレアルプミンは血液中に、約300μg/m1程度存在する血清蛋白のひとつであり、血中ではこれが4分子集合し分子量55,000の複合体として存在している。この複合体は甲状腺ホルモンとの結合部位を2ケ所持ち、同ホルモンの輸送に関与してい

る。 さらに、 この複合体はビタミンA 結合蛋白の結合部位を 4 ケ所持ち同ビタミンの輸送にも関与している。 その他、 プレアルブミンの詳細な機能に関してはまだ正確には解明されておらず、 今後の研究成果が期待されている。

最近、N末端より30番目のパリンがメテオニンに変異した異型プレアルプミンが遺伝網家族性アミロイドニューロパチー(PAP)の病因と疑くかかわっていることが明らかにされ、そのDNAを解析することで遺伝子診断も可能となっている。

この中で、特にFAPの病因と考えられる異型 プレアルプミンはFAP患者の血液を厚材料とせ ざるを得ず、その機能と病因との関連を解明する トで大きな制約がある。

このような状況において、プレアルプミン特に異型プレアルプミンの原材料の入手における制約を解決できる有力な手がかりとなるのは、 遠伝子組換えを応用し量産を可能にする技術の関発であるう。 しかしながら、 これまでに遠伝子組換え等の技術を用いてプレアルプミンもしくは異型プレ

すなわち、本発明は、プレアルプミン遺伝子を 組込んだ新規な組換えプラスミド、それによる形 質転換酵母および酸酵母によるプレアルプミンの 生産方法を提供するものである。また、本発明は これまでヒト血液からの分離が難しく、 試料の人 手に問題があった異型プレアルプミンに関しても これを限界なく大量に供給することを可能にする ものである。

本発明のプレアルアの製法には、、
のの対していて、
のの対していて、
のの対して、
のの対して、
のの対しないで、
のの対しないで、
のので、
ののでで、
のので、
ののでで、
ののでで、
ののでで、

アルプミンの発現を試みたような報告はまだ見あ たらず、勿論発現に成功した報告もない。

このような事情のもとに、 本発明者らは、 先に 熊本大学医学部の前田らがクローニングに成功し たヒト由来のプレアルアミン遺伝子、異型プレア ルプミン遺伝子(Mita et al,Biochem. Biophys. Res. Commun. 124, 558-564 1984)を用い、最初 に大幅菌を宿主としてプレアルプミンの発現を試 みた。 しかしながらその結果としては、好ましい 成果は得られず、大陽菌を宿主とした発現の試み は失敗に持った。その後さらに本免明者らは酵母 を宿主として用いたプレアルプミンの量産につい て特財を重ねた結果、酵母の遺伝子と大腸菌の遺 伝子とを含みかつ酵母のプロモーターの制御下に プレアルプミン遺伝子を組込んだ新しい組換えり NAを開製し、それによって酵母を形質転換させ、 かねる形質転換融紐を用いてヒト虫来のプレアル プミンと同じ分子量、 免疫学的性質を有するプレ アルプミンを量産させることに成功し、本森明を 完成するに至った。

本発明の完成によって、in vitroで人為的に任意の部位のアミノ酸を変異させたプレアルプミンが容易にかつ量的に入手し得る手段が解決されたもので、本新技術はきわめて興味ある知見を今後生み出す可能性を提供するものである。

本技術は、ヒト血液を原材料とせず、、ヒトカレアルプミンを容易に入手し得る手段も同時に与えるものであり、 今後の競蛋白の医薬品化に与えるの方法でヒト血液から精製した場合のようにとり血液を対した。 大生のである。 さらには、 は 対のである。 さらには、 は 対のである。 さらには、 は ガーンに で で あった、 異型プレアル で れんこれを う後の が な より その 制的が解決 で が に なり、 今後の 下 ん に 関する 研究に大きく貢献するものと 今えられる。

以下に本発明の組換えブラスミド、形質転換除母、およびそれによるプレアルプミンの生産についてさらに詳細に登明する。

(1) プレアルプミン遺伝子

本発明で用いられるプレアルブミンをコードする c D N A は、ヒトの肝臓より調製した mRNAを出発材料として、常法に従い逆転写酵素により二本銀 c D N A を合成し、これを大腸菌によりクローニングしたものである。クローニングされたプレアルブミン遺伝子はプレアルブミン遺伝子はプレアルブミン遺伝子はプレアルブミン遺伝子する金領域を含み、第2回に示す塩基配列を有する。

本発明において調製されたプレアルプミンcDNA は、668塩基対からなり、アミノ酸をコードする領 域の完全な配列を含む。 さらに、プレアルプミン cDNAは5'-非質訳領域に26、3'-非質訳領域に161の 放塞対を含む。

第1回の制限即無回および第2回に示す地基配列を有するDNA断片が大議菌プラスミド Okayama-BeryベクターにオリゴdG、dC法により挿入されたものを、通常はPst I-Pyu IIで処理してプレアルプミン遺伝子断片を得、後述のプラスミド構築に供する。必要に応じ、成熟プレアルプミンを直接扱

レアルブミンの遺伝子は、正常プレアルブミン遺伝子を用い、この遺伝子にポイントミューテーションを起こさせ必要な箇所のみ塩基を変換することによっても関製することができる。

(2) シャトルベクター

本発明で用いられるシャトルベクターは、 酸母の遺伝子と大腸菌の遺伝子とを含みかつ酵母の形質免現関節領域を担ったプラスミドベクターである。

この酵母の遺伝子としては、一般に、プラスミドが酵母中で染色体と独立して増殖するのに必要なDNA配列、例えば酵母染色体の複製に必要なDNA配列(2μori)があり、所望により、さらに形質転換酵母の選択マーカーとなる遺伝子が含まれる。この選択マーカーとしては、ロイシン産生遺伝子、ビスチジン産生遺伝子、トリプトファン産生遺伝子、ウラシル産生遺伝子、アデニン産生遺伝子などが含まれ、これらの1種または2種以上が用いられる。

大腸菌側の遺伝子としては大腸菌体内において 📑

換え酵母に発現させるために、翻訳される第1番目から20番目までのアミノ酸、すなわちシグナルペプチドの部分をコードする遺伝子を予め除去しておくこともできる。この場合には、閉始コドンのATGも同時に除去されるため、後に述べるシャトルベクターにプレアルプミン遺伝子を組み込む際に開始コドンとなるATGを付け加える工夫が必要となる。

なお、本発明で述べるプレアルプミン遺伝子は、 第2回に示す塩基配列を有するものに限定される ものではない。

また、異型プレアルプミンをコードする遺伝子も、 FAP患者の肝臓より 異似した mRNAより 同様にして異型プレアルプミンをコードする cDNA を調製することができる。 このようにして得られた異型プレアルプミン遺伝子は、 正常のプレアルプミン遺伝子配列と比較して、 1 塩基の違いしかなく、 プレアルプミン遺伝子の関映開始コドンを・+1とした場合に第149番目(+149)のシトシンがアデニンに変異しているだけである。また、風影ブ

プラスミドが増殖するために必要なDNA配列(ori)を有し、好ましくはさらに形質転換大隔菌の選択マーカーとなる遺伝子を含む。この選択マーカーの遺伝子としてはアンピシリン耐性遺伝子、カナマイシン耐性遺伝子、テトラサイクリン耐性遺伝子、クロラムフェニコール耐性遺伝子などが挙げられ、これらの遺伝子の! 種または2種以上が用いられる。このような大願すDNAとしてアンピシリン耐性遺伝子とテトラサイクリン耐性遺伝子を有するp8R322が一般に汎用されている。

超換え酵母によりプレアルプミンを産生させるために必要な形質発現調節領域(プロモーター)には酵母由来のものが用いられる。好ましいプロモーターの例としては、酸性フォスファターゼブロモーターやグルタルアルデハイドデヒドロゲナーゼブロモーターのように本来酵母に必要な酵素等の形質発現を行うプロモーター等が挙げられる。具体的な一例として酵母の抑制性酸性ホスファ

ターゼプロモーターは通常ホスファターゼを構成する60,000ダルトンのポリペプチド (p80) のプロモーターであり、そのプロモーター活性もかなり強力で、且つ培地中のリン酸濃度をコントロールすることによってプロモーター活性を制御できることに大きなメリットがある。

このようなシャトルベクターの代表的な例は、本発明者らにより調製された。 即母側の遺伝子として ars1、2μoriおよびロイシン耐性遺伝子 (Le u2) を有する B母 DNAと大腿菌プラスミド p8R322とを組み合わせたシャトルベクター PAM82 (特別昭59-36699) であり、これはつぎのようにして構築される。

除母S288G DNAバンクより得られた抑制性酸性ホスファターゼを構成する60,000ダルトンのボリペプチド (p80) の遺伝子を含む約8000塩基対 (8Kb)の制限酵素 EcoR I 断片 [PNAS, 77巻、6541~6545頁、(1980)および PNAS, 79巻、2157~2161頁、(1982)を参照]を公知の大腸菌プラスミド pBR322 [Sutcliffe, J. G., Cold Spring Harbor Symposiu

arsi-Trplを含む断片は、そのTrpl遺伝子内に制展 酵素Hind皿の認識部位を1個所有する。

上記pAT26の Hind 田部位に酵母のロイシン産生遺伝子 (Leu2) と 2 μ m D N A の複製に必要な D N A 配列 (2 μ ori) を含む Hind 田断片 (Tohe, A., Guerry, P., Vichener, R.B.; J. Bachteriol, 141, 413~416, 1980を参照) を挿入する。このようにして得られるプラスミドがシャトルベクターpAT77 (特別 昭 59-36689を参照) である。

このpAT77は、大脳圏の遺伝子としてpBR322のアンピシリン耐性遺伝子(Ap')を含むEcoR I 部位からSal I 部位までを有し、一方酵母の遺伝子として、pBR322と結合したEcoR I 部位よりars1、2μori、Leu2遺伝子の順に位置し、さらにそのつぎに酸性ホスファターゼ遺伝子の上流からSal I 部位までを有する。そしてそのEcoR I およびSal I 部位でこれら大脳菌遺伝子と酵母遺伝子が結合した構造となっている。このpAT77は大腸菌内においてはpBR322の複製起点 DHA配列(ori)により増殖し、また酵母内においてはars1および2μoriにより増殖可能と

■.43巻、77~90頁、(1979)を参照]の EcoR I 部位に挿入して得られるプラスミドを出発材料とする。なおこの 8 K b D N A 断片は制限酵素 Sal I の認識部位を約2.8 K b 色 が p B R 3 2 2 の アンピシリン耐性遺伝子側になるように挿入されている。

このプラスミドを制限股票Sallで切断し、さらにT4DNAリガーゼにより再アニールさせてpBR322のSall部位から酸性ホスファターゼ遠伝子断片の5.2Kb創を失ったプラスミドを得、これをpAT25と称する。このpAT25はpBR322のアンビシリン耐性遺伝子を含むEcoRl部位からSall部位までの約3.7 Kbの断片と酵母の酸性ホスファターゼ遺伝子のEcoRl部位からSall部位までの約2.8Kbの断片がそれぞれ対応する末端同志で結合したプラスミドである。つぎに、上記pAT25のEcoRl部位に、酵母の14増殖に必要なDNA配列(arsl)および酵母のTrp1遺伝子を含む1.4KbのEcoRl断片[Pro、NAS,76巻、1035~1039頁、(1979)を参照]を挿入する。得られたプラスミドをpAT28と称する。なおこの

なる。 さらにこのプラスミドは、通択マーカーとしてアンピシリン耐性遺伝子 (Ap') およびロイシン産生遺伝子 (Leu2) を有しており、 大願商、除母苗のいずれの細胞内でも増殖でき、 シャトルベクターとしての条件を充分に満たしている。

なお、このシャトルベクターを用いるのは、後 記組換えプラスミドを大層菌を用いて調製するためであり、 該組換えプラスミドで酵母を形質転換 する段階に至っては、 大層菌の遺伝子は除去され ても問題はない。

このようなシャトルベクターpAT77 を制限除去Sallで処理して開製させ、ついでこれをエキソヌクレアーゼBAL31で処理することにより散性ホスファターゼ構造遺伝子の一部または全部と、所望によりさらにその上流の種々の部分まで除去する。この除去は散性ホスファターゼ構造遺伝子の上流-50bpの前までの適当な部位まで行われ、エキソヌクレアーゼ処理条件により適宜関節される。

上記のようにして酸性ホスファターゼ構造遺伝 子全部もしくはさらにその上流部分を除去したの ち、この部位に合成または天然のリンカー、例えば Sal I リンカーまたは Xho I リンカーを組込み再び環状プラスミドに戻すことにより、酸性ホスファターゼプロモーターの制御下に外来性遺伝子を純粋な形で発現させ得るシャトルベクターが得られる。このようにして酸性フォスファターゼ構造遺伝子の上流・33bpまで除去したシャトルベクターが、pAH82である。

このシャトルベクターは、通常の制限降素 Sall または Xho I で処理することにより容易にその組込み部位を開発させることができるため、所望の遺伝子を組込むのに好適である。このようなシャトルベクター pAH82に関しては本発明者らにより特関 昭59-36699として特許出願されており、なお、この pAH82をサッカロミセス・セレビシェ AH22に組込んだもの(サッカロミセス・セレビシェ AH22/pAH82)は微工研条寄第313号として容託されている。

(3) プレアルプミン達伝子免現プラスミドの構築 本発明の組換えプラスミド、すなわちプレアル プミン遺伝子を組込んだプラスミドの調製は、ま

こさせる。 このように処理された酵母をベクター上に担われている宿主酵母の変異を相補する遺伝子、 例えばロイシン産生遺伝子の免頭を指標として形質転換酵母を選択し、分離する。

なお、酵母としてはロイシン要求性変異株のほかに、ヒステジン要求性変異株、トリプトファン要求性変異株、ウラシル要求性変異株、アデニン要求性変異株などが挙げられる。

(5) 形質転換酵母の培養およびプレアルアミンの 生産

上記の方法で得られた形質転換酵母を培養し目のアレアルブミンを得る。 この場合、 用いたがり ロモーターに応じて培養条件を工夫することを一ましい。 例えば、 酸性ホスファターゼブロモーター を使用した場合には、 得られた形質を投降的培し、 対数増殖期にある菌体をリン酸を含まないターゼンカン 対数増殖期にある菌体をリン酸を含まないターゼルン 対数増殖 が いっか かっか が が まん ペプチド 領域を除去したプレアルブラン 遺伝

ず前記シャトルベクターを使用したリンカーに対応する制限酵素、例えばSallまたはXholにで処理して問題させ、これに上記プレアルブミンDNAを作用させて連結させる。これを大腿菌にて増幅し、各種制限酵素分析によって正しい配位に組込まれたもののみを選択し、目的とする組換えブラスミドを得る。

(4)酵母の形質転換

形質転換されるべき即母としては、プラスミドで担われた形質転換酵母の選択マーカー遺伝子によって相補される変異を持った変異株、例えばロイシン要求性変異株であるサッカロミセス・セレビシェ(Saccharomyces cerevisiae) AH22 (a leu2 his4 Can1 (Cir*))、サッカロミセス・セレビシェ(Saccharomyces cerevisiae) AH22 pho80 (a leu2 his4 Can1 (Cir*) pho80) などを用いる。上記組換えプラスミドを大腸菌にて増殖させたのち、放酵母変異株に常法により作用させ、例えばスフェロプラスト化したのちカルシウム処理した菌体とプラスミドDNAを混合して形質転換を起

子を用いた場合には菌体内に、またシグナルペプチド領域を含む全プレアルブミン遺伝子を用いた場合には、その培養被中および菌体膜表面に分泌されたプレアルブミンが多量に集積される。 なお、用いる酵母の種類により、 例えばPho80変異体を用いた場合には、 酸性ホスファターゼプロモーターを抑制しない条件をとくに採用する必要はなく、 2000で貫転機能のプレアルブミンを大量に産生させることができる。

上記方法で得られるプレアルアミンは免疫学的にヒトの血中に存在するものと区別し違く、また、プレアルアミンが培地中に分泌、放出されることから、 舞母における蛋白質分泌研究のモデルとしても有用である。

つぎに実施例を挙げて本発明をさらに具体的に 説明する。

実施例1: ブレアルブミンの発現

- (1)プレアルプミン遺伝子の興製
- (I)mRNAの特u

ヒト肝臓は手術時に摘出し、液体窒素中にて直

ちに運枯し、これを用いて、チャーウィンら (Chiravin et al, Biochemistry, 24 5294-5299, 1979) の方法に従って、mRNAを再製した。

(II)cDNAの合成および大腸菌HB101の形質転換ヒト肝臓より得た mRNAをもとに Okayama-Berg法(Okayama, H. and Berg, P., Hol. Cell Biol. 2, 161-170, 1982) により、cDNAを含むプラスミドを作組し、これを大腸菌HB101に形質転換し、cDNAライブラリーを開観した。

(III)プレアルプミンcDNAの固定

Kandaら (Kanda, Y. et al, J. Biol. Chem., 249, 6796-8805, 1974) によって明らかにされているプレアルプミンのアミノ酸配列をもとに Asps-Gin^{® 2}に相当する部分の合成DNA16種を合成し、これをVallaceら (Vallace, R.B. et al, Nuclei c Acids Res., 6, 3543-3557, 1979) の方法により (r-²²P) ATPでラベルし、これをプロープとしてcDNAライブラリーのスクリーニングを行い、プレアルプミン遺伝子を含む大陽菌を選び出した。

(IV)プラスミド DNAの調製

站合したプラスミドである)を得る。

つぎに、このPAT25のEcoRI部位に、プラスミドYRP7をEcoRI処理することによって得られるarsl およびTrp1遺伝子を含む1.4KbのEcoRI断片を挿入してプラスミドPAT28を得る(このarsl・Trp1を含む断片は、そのTrp1遺伝子内に制限酵素Hind皿の・認識部位を1固有する)。

上記pAT26のHind回に、プラスミドpSLE1をHind回で処理して得られる酵母のLeu2および2μoriを含むHind回断片を挿入してシャトルベクターpAT77を得る。このpAT77をサッカロミセス・セレビシェAH22に組込んだもの(サッカロミセス・セレビシェAH22/pAT77)は微工研条寄第324号として寄託されている。

上記の方法で得られた pAT77 (1μ g) を Sal I で 開製したのち、 20mNトリスーHCI(pH8.2)、 12mM CaCls、 12mM MgCls、 0.2M NaCl、 1mM EDTA容液 50 μ l 中で 0.1Uのエキソヌクレアーゼ BAL31を 30秒~ 1分間作用させる。 ついでフェノール抽出、エタノール沈潤を行ったのち、 Xho I リンカー1pmolと T4

プレアルアミン遺伝子を含む大腸菌より松原ら (Matsubara et al, J. Virol., 16, 479-485, 1975) の方法によりプラスミドを調製した。 このプラスミドはOkayama-Bergペクターにプレア ルプミンをコードする全領域のcDNAがクローニン グされたものであり、これをpPAIとした。

(2) シャトルベクターpAH82の興製

辞母 S 288 G D N A バンクより得られた抑制性酸性ホスファターゼを構成する60000 ダルトンのポリペプチド (p60) の遺伝子を含む約8000 塩基対 (8 Kb) の制限酵素 E co R I 断片を大腸菌プラスミド p B R 3 2 2 の E co R I 部位に挿入して得られるプラスミドを出発材料とし、これを制限酵素 S a I I で切断し、さらに T 4 D N A リガーゼにより再アニールさせて p B R 3 2 2 の S a I I 部位から酸性ホスファターゼ遺伝子断片の 5.2 K b 倒を失ったプラスミド p A T 2 5 (これは p B R 3 2 2 2 の アンビシリン耐性遺伝子を含む E co R 1 部位から S a I I 部位まての約3.7 K b の 断片と酵母 面の酸性ホスファターゼ遺伝子のとco R I 郎位から S a I I 部位ま

での約2.8Kbの断片がそれぞれ対応する末端同士で

DNAリガーゼの反応条件下で12時間結合を行う。この反応溶液で大幅簡x1778を形質転換し、得られたアンピシリン耐性の形質転換体よりプラスミドDN Aを開製し、各DNAについてマキサムーギルパートの方法(Maxas, A, & Gilbert, V.; Pro・N.A.S., 74, 560~584を参照)に従い、塩基配列を関べ、8AL31処理により除去された酸性ホスファターゼ遺伝子領域を決定する。これら中からホスファターゼ構造遺伝子領域が完全に除去されたプラスミドpAM82(第3回)を得る。

ホスファターゼ構造遺伝子の皮物p60の最初のアミノ酸であるメチオニンをコードするコドンATGのAを+1として、pAH82は-33まで除去されたものである。 なお、このpAH82をサッカロミセス・セレビシェAH22に組込んだもの(サッカロミセス・セレビシェAH22/pAH82)は微工研条容第313号として容託されている。

(3)プレアルプミン遺伝子免項プラスミド (pNPAI) の四数

アレアルプミンをコードする全領域 (第1図参

照)を含むDNA断片が挿入されているアラスミド pPA1(3μg)を制限酵素HaeⅢ、 Xbal で切断処理し、 63-108番目の48bpよりなるDNA断片を精製し、これ に、 EcoR I の切断塊を持つ合成 DNAを結合し、これ をさらに、 EcoR L、 Xbal で切断処理したプラスミ ドpUC19の EcoRI-XbaIサイドに挿入した。 ついで、 このプラスミドをXbal、 Hinc II 切断処理し、これ に、 pPA1をXbal、 P.vn II 切断処理して得た5706bp のDNA断片を挿入した。 このようにして得たブラス ミドは、 プレアルアミンのシグナル 領域が除去さ れ、 さらに喜訳同始コドンとしてATGが、即ちN末 端 メチ オ ニ ン が 付 加 さ れ た ブ レ ア ル ア ミ ン cDNAを 持ったことになる。 つぎに、このプラスミドをEc oR I , Hind III で切断処理してプレアルプミンのcDN A部分を切り出し、これにXhoIリンカーを結合し t.

このようにして末端がXho!切断末端となったプレアルプミン遺伝子断片を得た。このDNA断片とXho!で開製されたシャトルベクターpAM82を、分子比5:1で提ぜT4DNAにより結合させた後、この反

スフェロブラスト化する。 ついで、 スフェロブラ ストを1.2Mソルビトール箱被で3回洗浄したのち、 2Mソルピトール、10mMCaClzおよび 10mHトリスー HCI (pH7.5) の溶液0.6mlに懸濁させ、 その60μl ずつを小試験管に分注する。 これに前記(3)で開製 した組換えブラスミドpNPAI溶液30μlを加え、充 分混合し、 さらに 0.1 M Ca Cla (3 μ l) 加えて 最終 線度 10mMCaClaとし、 宝温に5~10分間放置する。 つい でこれに、 20%ポリエテレングリコール 4000、10m MCaClzおよび10mHトリスーHCl(pH7.5)溶液1mlずつ を加えて混合し、 宜温に約20分間放量する。 この 混合液0.2mlずつを45℃に保温された再生培地(22%ソルビトール、2%グルコース、0.7%イーストニ トロゲンベースアミノ酸、 2%YPD、20μg/mlヒスチ ジン、 3%実矢) 10mlに加え、 軽く混合させ、予め 準備された1.2 Hソルビトール合有最小培地 (0.7% イーストニトロゲンベースアミノ酸、 2%グルコー ス、 20μg/miヒスチジン、 2% 东天) プレートに且 履し、固化させたのち、30℃で培養してロイシン 非要求住酵母のコロニーを得る。 このコロニーを

応液で大陽菌 HB101を形質転換した。得られたアンピシリン副性の形質転換体よりプラスミド DNAを調製し、それらについて、EcoR I、 Xba I、 Xho I で分析することにより、ベクターへのプレアルプミン遺伝子の組込みおよびその方向を確認した。 選び出されたプラスミドはベクターのホスファターゼブロモーターの下流にプレアルプミン遺伝子が正しい向きに挿入されたものであり、これをプレアルプミン遺伝子発現プラスミドの構築の流れを示したものを第4回に示した。

(4)形質転換酵母の調製

酵母としてサッカロミセス・セレビシエAH22[a leu2 his4 Canl (Cir*)] (数工研条符第312号)を用い、これをYPD培地(2%ポリペプトン、1%イーストエキス、2%グルコース)100mlに接種し、30℃で一晩培養したのち、遠心して集額する。減菌水20mlにて菌体を洗浄し、ついで1.2Hソルビトールおよび100μg/mlチモリアーゼ60,000(生化学工業製)の溶液5mlに懸潤させ、30℃で約30分間保ち、

20μ8/mlヒスチジンを含むパルクホルダーミニマルメディウム (Tohe, A. et al; J. Bachterol., 113, 727~738(1973)を参照) にて培養して形質転換酵母サッカロミセス・セレビシェpNPA1を得る。(5)形質転換酵母によるプレアルブミンの製法

前記(4)で得られた形質転換酵母の各コロニーをさらに20μ8/mlとスチジンを含むパルクホルダーミニマルメディウムの寒天ブレート上に塗布し、30℃にで培養してコロニーを形成再確認のためとつからででで、ないのでは、20μ8/mlとなったが、20℃になるないが、20℃にない。 30℃にない。 30℃にない。 30℃にない。 30℃にない。 20μ8/mlとスチジンを加えたもの) 10mlに接触は、スチジンを加えたもの) 10mlに対数数4×10°celis/mlになるように起調のは、20μ8/mlとスチジンを加えたもの) 10mlに放数4×10°celis/mlになるように起調ので、20μ8/mlとスチジンをあた。このようにして酵母のに産生されたブレアルブミンを得た。

リン酸濃度を低下させ、 プロモーター活性を誘導する前後でのプレアルブミンの酵素免疫剤定による剤定値を後記実施例2の第1表中に示した。

実施例2: 異型プレアルプミンの発現

(1)異型プレアルプミン遺伝子の餌製

FAP患者の肝臓を手術時に摘出し、実施例1の場合と同様にして異型プレアルプミンをコードするcDHAを調製し、これをOkayama-Bergベクターにクローニングし、これをブラスミドpPA3とした。(2)異型プレアルプミン遺伝子発現プラスミド (pHPA1) の調製

この異型プレアルブミンをコードする全領域を 含む DNA断片が挿入されているブラスミド pPA3(3μ8)を用い、実施例 1 と同様にしてシャトルベ クターpAM82の酸性ホスファターゼプロモーター下 流に異型プレアルブミン遺伝子が組み込まれてい る免項ブラスミド pMPA1を得た。

(3)形質転換酵母による異型プレアルプミンの製法 前記のプラスミドpMPA1を実施例 1 と同様に酵母 サッカロミセス・セレビジェAH22に導入し、形質

図)。 さらに、ウェスタンプロットの結果からも、 静母産生正常プレアルプミンはヒト血液由来プレ アルプミンと同一の分子量を有していることが確認された。 (第6図、レーン1:ヒト血情由来プレ アルプミン、レーン2:正常プレアルプミン発現酵母 面体破砕液、レーン3:異型プレアルプミン医生 酵母面体破砕液、レーン4:陰性コントロール用宿 主酵母菌体破砕液)

また、実施例2 における異型プレアルプミンも同様にFAP患者血液由来の異型プレアルプミンと免疫学的に同一であることが判明した。 (第5 図、第6 図参照)

4.図の簡単な説明

第1回は、プレアルプミン遺伝子の制限酵素切断地図、第2回はプレアルプミン遺伝子の塩基配列とこれから予想されるアミノ酸配列を示す。

第3回は、シャトルベクターpAM82のプラスミド図を示す。

第4回はプレアルプミン遺伝子発現プラスミド の複類図を示す。 転換酵母を得、これを同様に培養した。第1表に リン酸濃度を低下させ、プロモーター活性を導入 する前後での異型プレアルプミンの酵素免疫剤定 の練星を示した。

第 1 表

| プラスミド | プレアルブミン産生量(μg/ml) | |
|-------|-------------------|-----|
| | 誘導前 | 誘導後 |
| pNPA1 | o | 5.3 |
| pMPA1 | 0 | 2.1 |

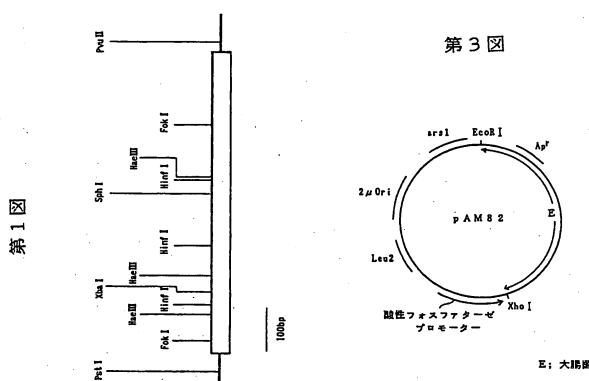
実施例3: 産生されたプレアルプミンの解析

前記実施例 1 および実施例 2 により得られたプレアルプミン (正常) および異型プレアルプミンの免疫学的性状をヒト血液由来のプレアルプミンのそれと比較することにより調べた。

その結果、正常プレアルブミンを産生している 酵母菌を破砕して得られる粗抽出液の酵素免疫測 定における反応性は、ヒト血液由来のプレアルブ ミンのそれと同一であることが確認された(第5

第5回は酵母産生正常プレアルアミン、異型プレアルアミンおよびヒト血液由来プレアルアミンの酵素免疫測定における反応性を示す。

第8回はヒト血液由来プレアルプミン(レーン 1)、酵母産生正常プレアルプミン(レーン2)、 酵母産生異型プレアルプミン(レーン3) および 宿主酵母菌粗抽出液(レーン4) のウェスタンプ ロット像を示す。



E; 大腸菌由来遊伝子

His Ala Glu CAT GCA GAG Gly Glu Ser GGT GAA TCC Leu CTG 58 A!A Ser a E TXC 声台 Ala GCT Val Val Thr Asn Pro Lys Glu *** GTC GTC ACC AAT CCC AAG GAA TGAGGGACTTCTCCTCCAGTGGACCTG a a gg a cg a gg a t t t ca t gt a a cca a ga gt a t t c a t t t t a c a a g CTGTTTTCACCTCATATGCTATGTTAGAAGTCCAGGCAGAGACAATAAAACATTC Glu Glu I GAG GAA 1 Arg Arg Tyr CGC TAC Lys Lys Ser AAA TCT Thr ACG Thr Acc Arg AGA Val GTC A1a GCT Lys AAA Thr His Glu CAT GAG Thr Ala G1 u Arg Le u CTT 7 Pe 91, GIU IIE ASP Thr GAA ATA GAC ACC Tyr Ser Tyr Ser TAC TCC TAT TCC Val . 5 2 3 3 3 Asp Cy3 TGC Se Tot 걸 Ala Val Ris GCC GTG CAT Pro Phe CCA TTC Ser Gly TCC GGC Leu Leu CTC CTC Pro Thr CCT ACG Leu Ala Thr Ya. Leu a E Ser Pro 1 AGC CCC 1 Leu Leu CTC Val Lys GTC AAA G13 GGG Val Ser TCC Val Phe Thr Ala Asn Asp GTA TTC ACA GCC AAC GAC 01. 000 SC Z Asn Val / 940 010 HIS CAT Lys I le Ala GCT Leu Met CTG ATG GGC Ala Ala Leu Leu GCC GCC CTG CTG HIS AFE CAT CGT G A G Leu CTG Glu Gly lle Tyr GAA GGG ATA TAC 7r7 766 11e ATC 0YG Ser TCT <u>بر</u> 2 Trp Lys Ala Leu TGG AAG GCA CTT Ala Ser GCT TCT Phe Val Ala GCC ASP GGA Pro Cys TGT Ser r to Asp GAT n I g Val l le ATT Val GTA Lys AAG Ser Ala Va I GTA

ACAGAAGTCCACTCATTCTTGGCAGG

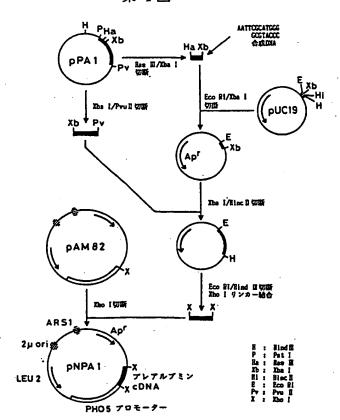
区

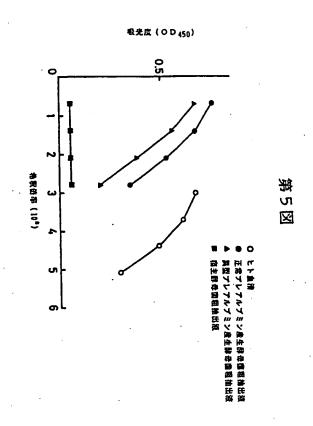
N

紙

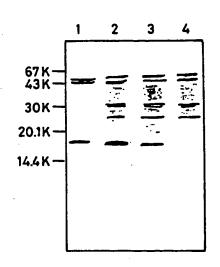
- 640 -

第4図





第6図



第1頁の続き

@Int_Cl_4

識別記号

庁内整理番号

//(C 12 N C 12 R (C 12 P C 12 R 15/00 1:865) 21/02 1:865)

⑰発 明 者 濱 田 福三郎

熊本県菊池郡西合志町須屋2679-2